

早期婚が原因で失われる命を救うために

スワプナ・マジウムダール (インド)

インド・ビハール州のシーターマリー県にあるボラマール中学校への入学者数を比べると、女子生徒数は男子生徒数を上回ります。しかし、数字を見ただけでは真実は分かりません。8年生（14歳）になる頃には、女子が学校に来なくなっていることが目立つようになります。それは、早期婚が広く蔓延しているからです。

シーターマリー県は、地理的に北側がネパールとの国境に接しており、ビハール州の中でも外部からの影響をより受けやすい県の一つです。同県は移民比率が高いというだけでなく、越境および州際の人身取引の被害が起きやすい場所としても知られています。州内でも最もHIVの感染率が高い同県では、早期婚の件数も多く、未成年者の脆弱性が高まっています。

ボラマール中学校の教師たちによると、2015年に学校に来なくなった8年生の女子生徒は全て、親が決めた相手と結婚させられたということです。同校で過去5年間にわたり6年生から8年生までを教えた教師のヴィニータ・クマリさんは、早期婚は大きな問題だと指摘します。去年8年生だった女子生徒のうち、学校に姿を見せなくなった生徒は全て、結婚が理由で学校を辞めたのですが、これは村のしきたりのひとつとして、誰も特に問題視していないとクマリさんは語ります。しかしこれは同時に、幼くして結婚する女子の大半が、それ以降は勉強を続けられないことを意味しています。

グライチ・クマリさんはボラマール中学校の8年生でしたが、今年の3月末に14歳の若さで結婚しました。そして今年の4月には、その友人で同じく8年生のピンキー・クマリさん（16歳）も、同じように結婚しました。二人とも勉強を続けることを望んでいたのですが、それは無理だと分かっていました。しかし、この二人は少なくとも8年生になるまで学ぶことができました。アヌラダさんの場合は、それさえも叶いませんでした。7年生だったアヌラダさんは、2016年3月の第一週に結婚したのですが、自らの結婚に対して何の発言権も持っていませんでした。孤児として親戚と暮らしてきた彼女は、結婚について選択の余地を全く与えられず、中学校を中退しました。

公式統計によると、周縁化された層の子供たち、とりわけ女子の学校中退率が非常に高くなっています（66%）。インド全国家族健康調査（2015～2016年）の結果では、シーターマリー県の20歳～24歳の女性の50.5%は、18歳になる前に結婚しており、15歳～19歳の女性の11.7%は、調査の時点で既に子供がいるか妊娠中だったということです。

早期婚をした少女がセックスやリプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）に関する情報を十分に得られていない場合、あまりにも多くの子供をあまりにも早くに産み育てるという悪循環から抜け出せなくなります。10歳から14歳までの少女の妊産婦死亡率は、20歳から24歳の女性と比較して5倍にも上ります。インドでは、毎年およそ6,000人もの若い母親が命を落としています。その上、母親が20歳に満たない年齢で出産した乳幼児は、母親が20歳以上の場合と比較して、死亡する可能性がより高くなります。

しかし、コミュニティサービスを行っているサドナさんのような女性が、母親と赤ちゃんの生死を分ける重要な存在となっています。

サドナ・クマリさんは政府から認定を受けた保健師で、シーターマリー県のベルサンド地区で仕事をしています。ある日、サドナさんの隣人の息子の嫁である16歳の少女が妊娠し、自宅でお産しました。サドナさんは夜中であるにもかかわらずその家に駆けつけました。しかし残念ながら、赤ちゃん

は早産で弱っており、命を落としました。政府統計によると、シーターマリー県における乳幼児死亡率は出生 1,000 人あたり 106 人となっています。

サドナさんは赤ちゃんの死を悼みました。しかし、悲しみに心を痛めるだけでなく、これを機に妊婦の義母である隣人に、あることを説得しました。それは、この少女が心身共に十分に回復するまで、次の赤ちゃんを産むよう急かしたりしないということです。実際、サドナさんはこの隣人から、「次の赤ちゃんまで少なくとも3年は待つ」という約束を取り付けました。3年後には、この義理の娘であるピンキーさんも19歳になり、母親になる準備がより整っただけでなく、乳児の死亡リスクも減少しました。

こうして、サドナさんはその後3年間にわたり、この隣人家族を見守りました。その際、ピンキーさんが適切な家族計画を立て、母親になる時期を遅らせることができるよう、経口避妊薬を与えるとともに、性と生殖に関する健康について情報を提供しました。そして、今年1月にピンキーさんは地元の医療センターで元気な女の子を出産し、セドナさんの努力は実を結んだのです。



ボラマール中学校の女子生徒たち